

十島村教育委員会だより 令和3年12月号

さわやかトカラ情報

南北160km

「心をつなぎ 気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822
鹿児島市泉町13番13号
TEL 099-227-9771



新しいALTを迎えて(真ん中2人)

12月・・・全国の島の大きさ
十島村教育長 有村孝一

NPO法人離島経済新聞というのがあります。そこが「島の大きさ一覧」という大きなポスターを出しています。掲載離島は、令和3年5月現在で、離島振興法など様々な「法律の対象になる離島」を対象に各機関が出しているデータを収集して、離島経済新聞の独自の調査に基づいたものです。それによりますと、全国には419の離島があります。最も大きい島が新潟県の佐渡島で人口57,255人です。以下、2位が奄美大島の64,517人、3位が長崎県の対馬島の31,301人、4位が兵庫県の淡路島の144,144人、5位が熊本県の天草下島68,308人、6位が屋久島の12,913人、7位が種子島の31,887人、8位が長崎県の福江島34,419人、9位が沖縄県の西表島2,314人、10位が徳之島の25,808人ということです。10位までに鹿児島県から4島入っています。県内には、有人無人を合わせて300を超える島が存在します。やはり全国でも存在感があるようです。

そこで十島村の島々が、どれくらいの位置にあるのかということが気になる場所です。一番大きな中之島が43位です。諏訪之瀬島が53位、口之島が85位、悪石島が119位、宝島が126位、平島が226位、小宝島が284位となっています。小宝島よりも小さな島があつた115島あるようです。日本には小さな島が多くあるのだということを、改めて感じるところです。

1位から10位までは前述のとおりですが、小さい方から5つを見てみますと、415位が北海道の小島12人、416位が愛媛県の来島15人、417位が長崎県の桐ノ小島、418位が長崎県の蔵小島8人、419位が一番小さな島が、千葉県仁左衛門島0.02kmの広さで人口2人となっています。

これまで、離島がいくつぐらいあるのか、知りませんでした。今回一枚のポスターから様々なことが見えてくるような気がします。それぞれの島には、それぞれの存在する理由があり歴史があるはずなんです。そんなことを思いを巡らして見ると大変面白いのではないかと思います。トカラ列島は、南北160kmで人が住む島としては、日本一長い村であります。このことに誇りを持ちたいものです。

さて、今回で私が執筆する「さわやかトカラ情報」は最後になります。この12月で任期満了に伴い退任いたします。就任の7年4か月の間に89号になります。全村の皆様に読んでいただくわけですから、その時々に応じた話題をお届けしようと思えるだけ肩ひじの張らない、ゆっくりとした気持ちで読んでいただくことに心がけてまいりました。いかがだったでしょうか、楽しんでいただけたでしょうか。ここで、筆を置きたいと思っております。ありがとうございました。

第69回学校新聞コンクール 1席(2年連続)「タモトユリ」 口之島小・中学校

2年連続の受賞をした口之島小・中学校新聞部の部長さんと担当の先生にお話を聞きました。

☆ 肥後優衣花部長さんから
記事を書くときは、読む人に伝わるような文章の書き方や特徴のあるおもしろい見出し、レイアウトなどを工夫しています。読む人に分かりやすく、口之島に関心を持っていただくにはどうすればいいのかを意識しながら記事を書いています。



☆ 担当の原田先生・中村先生から
日頃から気をつけていることは、子どもたちが思ったことや感じたことを大切にすること、日頃から心がけています。子どもたちが自信を持って、思いや感情を自分なりの言葉で表現できるようにしてきました。新聞記事を書く際には、取材内容についてまずは書いた記事を読んで、どう思ったかなどを自分の言葉で表現すること、深みのあるよりよい記事作りにつながっていくと考えながら指導しています。



☆ 大園校長先生から
全児童生徒の主体的な取組として毎月作成する新聞「タモトユリ」は、地域(口之島)をテーマに、島民の方へのインタビューを通して対話的活動を行い、編集する中で、それぞれの思いや考えをさらに深めていく、大変意義ある取組になっています。まさに「主体的・対話的で深い学び」を実践できる取組です。そして子どもたちの活動を支えているのは地元、口之島の皆さんです。「地域あつての学校」、「学校あつての地域」の証として、これからも学校新聞「タモトユリ」の編集や作成に注目していただきたいと思います。



第8回「心に残る給食の思い出」作文コンクール 農林水産大臣賞受賞 宝島小学校5年 松元 大樹

「明日は、大好物の焼きそばだ。」給食のこん立を見てよろこんでいる。こしながら、不安そうな顔をして、「明日が初めての給食のお仕事なの」と言った。4月から、ぼくがいる宝島小・中学校の給食調理員として働くことになった。毎日、ぼくたちの家族のごはんを作ってくれているので、給食を作ることはかんとしたと思っていて、僕が思っている以上に大変なことだった。まず、清潔第一で、細菌やウイルスが入らないように、月に二回の検体検査をしていくこと。そして、もし作ったことのない料理だったら、調べている。その日のこん立でのうち、どの料理を担当するかは、当日にならないと分からない。母が初めて給食を作る日がやってきた。

「今日は先生に、今日はお母さんが初めて給食を作る日なので、いつもよりふやしてくださいます。」と言うと、先生は、特に大好きな焼きそばを大もりしてくれました。家でも、焼きそばは食べたことがある。でも、いつもよりもその日の給食はおいしく感じた。家に帰って、母に「今日の給食はどれもおいしかったけれど、特に焼きそばはおいしかったよ。」と、特にお母さんに話した。母はうれしそうにニコニコ笑って、「そう。良かった。焼きそば担当はお母さんだったんだよ。」と言った。前日の、あのきんちようした母の顔と全然ちがって、とても安心した。うん、うれしくなっている。その日の夕食もたくさん食べた。母が給食調理員として働く日は、毎週金曜日だ。やっぱり前日には、こん立で表

でも、母の顔は以前より少し自信があるように感じた。ぼくは、「今日もきんちようするの。」と母に聞くと、母は「きんちようはやっぱりするけれど、大樹においしいと言ってもらえるから、がんばる。」と言った。それから、月日がたった。今日は、母が給食調理員として働く最後の日だ。児童生徒がお礼のメッセージを書いた。このメッセージカードを渡すのは、給食委員長である僕の役目だ。母に渡すのは少し照れくさかったけれど、これまでの感謝の気持ちを伝えることができた。最後のこん立では、スパゲティだった。焼きそばとスパゲティは、ぼくと母にとって忘れられない給食になった。



シリーズ・・・十島村で学ぶ

【小宝島で学ぶ】「十島の一員として」
小宝島小学校5年 岩下捷人

小宝島未来計画を文化祭で意見発表するために、話題にする材料を集めた。その中で、役場のホームページの肥後村長の「村営定期船の年間を通した週3便を目指す」という意見をまとめようと思った。今、週2便と臨時便15便の村営定期船が運航しているが、これで約40便が増えることになる。これを見たとき、ぼくも、週3便に賛成だということを出して、これをまとめようと思ったのである。船の便数が増えることは、十島村に多くの人があることになる。十島村にはぎやかになるだろう。それは、十島村の人々の生活にもつながると思う。ぼくの父と母にも意見を聞いてみた。「小宝島は人の乗り降りが大変だ。」ということから、今のままの方がよいということだった。しかし、ぼくは人の乗り降りがなくても、小宝島に物が届くためには必要だと思ふ。物が届くことで、ぼくたちは食べたいものや欲しいものを手に入れることができる。ぼくたちの生活は豊かになるのだ。船の便数が増えることは、十島村の人々の生活が豊かになることにつながるはずである。だからこそ、ぼくは、十島村の一員として、協力していきたいと思う。



【諏訪之瀬島小・中学校からのメッセージ】 教頭 外越 俊朗

今年度諏訪之瀬島小中学校に赴任し、半年が過ぎました。これまで職員や島民の方々に支えられ諏訪之瀬島の生活にも慣れてきたところです。新型コロナウイルス感染症の影響と御岳の噴火に伴い、恒例行事の短縮や中止もありましたが、これからは、島の文化や伝統を楽しんでいきたいと思ふ。諏訪之瀬島小中学校での勤務は私にとって、これまで経験できなかった貴重な学びの場となっています。小中併設校での教育活動は小中の学習の系統性と、各学年における学習内容の習得の大切さをあらためて実感します。職員室では日頃から児童生徒の様子や学力向上に向けた情報交換が行われ、校内研修を通じてお互いの授業力の向上に努めています。私自身も今年度から理科の授業を担当することとなり、身のまわりの現象や法則、化学式などを、「いかに興味を持たせて楽しく学ばせるか」を自身のテーマとしました。その実現に向け、授業展開を模索する日々です。要点を捉えた簡潔な説明で伝えるのは容易ではなく、実験では予想通りに行かない時もありますが、幸いにして、子どもたちの理科への好奇心が助け船となっています。これからも子どもたちと「教学一如」の精神で歩んでいきたいと思ふ。



『教職員仲間であるあなた』への 私からのメッセージ
十島村での生活は、日々学びと、気づきの連続です。新しい自分を発見できるチャンスです。ぜひ一緒に学びを広げていきましょう。